

# TEAP 連絡協議会レポート

## 第 6 回 TEAP 連絡協議会 開催！

思いは一つ「日本の英語教育のために」！

改革への情熱を込めて、4 技能入試を語り合う！



### 第 6 回 TEAP 連絡協議会 「4 技能入試の現状と未来 ～2016 年度入試を終えて、これからどうなる～」

(実施概要)

#### 実施概要

公益財団法人日本英語検定協会(英検協会)は、大学入試の改善を進めてきた大学様の取り組みを、TEAP 連絡協議会加盟大学様及び英語教育・入試ご担当者様と広く共有させていただく機会として、「4 技能入試の現状と未来～2016 年度入試を終えて、これからどうなる～」と題し、第 6 回 TEAP 連絡協議会を行いました。

日時:2016年6月7日(火) 15:00~17:45

場所:早稲田大学 国際会議場 井深大記念ホール

発表に先立ち、共催大学を代表して、早稲田大学副総長・大学総合研究センター所長・理工学術院教授の橋本周司氏から、開会の挨拶をいただきました。

そして、文部科学省国際教育課主任学校教育官(国際教育担当)の齋藤潔氏、英検協会の松平知樹が、上智大学理工学部教授・学事局入学センター長の伊呂原隆氏、立教大学経営学部教授・入試委員・グローバル教育センター長の松本茂氏、早稲田大学文学学術院教授の安藤文人氏がそれぞれ、4技能導入への入試改革における現状と展望などについて発表しました。

最後に、パネリストとして齋藤潔氏、伊呂原隆氏、松本茂氏、安藤文人氏にご登壇いただき、松平知樹がモデレーターを務め、「4技能入試元年でみえた課題と今後」と題したパネルディスカッションを展開しました。

## プログラムレポート

### 開会～共催大学(会場校)挨拶

早稲田大学 副総長・大学総合研究センター所長・理工学術院教授  
橋本周司氏



(早稲田大学 橋本周司氏)

**橋本氏:**早稲田大学は2032年の創立150周年に向け、いろいろな対策を進めていますが、その中の大きな目玉の一つが「国際化」です。毎年5,000名を超える留学生を早稲田大学で受入れ、3,000名以上の学生を海外に送り出すところまでできましたが、今後はさらに倍以上の人数にした

いと対策を講じているところです。

なかでも英語教育では、「英語を教育する」のではなく、「英語で教育する」という体制を作っていきたいと考えています。本学の文科構想学部・文学部が 2017 年度から 4 技能入試を取り入れるということで、英語教育のあり方が大きく変わってきていると実感しているところです。

今日は、文部科学省からのお話、各大学のさまざまな試みを聞かせていただき、新しいヒントを持ち帰っていただければと思います。



(文部科学省 齋藤潔氏)

## 「我が国における英語 4 技能入試の現状と展望」

文部科学省 国際教育課 主任学校教育官(国際教育担当)

齋藤潔氏

**齋藤氏:** こちらの連絡協議会とは異なる、英語 4 技能の連絡協議会というものがあります。そこでは、英語 4 技能の民間資格検定試験を活用したような活動の促進などを行っておりますが、今回はその活動を紹介しながら、昨年度その協議会で行った、「大学入試における 4 技能入試に資格試験の活用実態に関する調査内容」をご紹介します。

「民間の英語資格・検定試験の大学入学者選抜における活用実態に関する調査研究」によりますと、「大学アンケート調査の結果」では、入学選抜において民間の英語資格・検定試験を活用している大学は 43.0%でした。「活用している理由」のトップ 3 は、より優秀なグローバルで意識が高い学生を確保するためが 64.2%、採用している民間の英語資格・検定試験で入学者に求められる英語 4 技能の能力が測定できるからが 48.2%、テスト結果の客観性・国際的通用性があるからが 47.2% でした。対して「活用していない理由」は、自校で行っている入学者選抜の方法

で十分と考えているが 74.2% と、群を抜いて 1 位となっています。

入学選抜において民間の英語資格・検定試験を活用している大学に行った「大学インタビュー調査の結果」では、民間の英語資格・検定試験の入試への活用の意義と効果について、「高校生の英語力向上に役立っている」「民間の英語資格・検定試験が客観的なデータとして活用できる点」などの回答が得られています。

続きとして、今後の一層の活用に向けた見込み・展望・戦略等については、「大学入学者選抜において英語の 4 技能が求められる一方、高校時代の取り組みが必要となる。4 技能を教育できる英語教員の確保もますます必要になるだろう」「大学入学者選抜を変えたからには大学入学後の学生のモチベーションを下げることをせず、学生の期待にこたえられるようなカリキュラム開発が一層必要になる」「他学部にも枠を広げる」などの回答がありました。

最後に、「民間の英語資格・検定試験を活用して入試ができる大学が増えることが有益だと思う」「まあまあ有益だと思う」という方が、かなりの割合を占めています。大学の側にも、文部科学省にも、資格・検定試験の導入というのが求められている、と考えられます。



(日本英語検定協会 松平知樹)

## 「2015 年度 TEAP 受験概況および TEAP CBT ご案内」

公益財団法人 日本英語検定協会入学選抜において民間の英語資格・検定試験を活用している大学

松平知樹

松平: 本日は、「2015 年度の TEAP 受験状況分析」「2016 年度に行われる、2017 年度入試 TEAP 活用状況」「本年度から実施する TEAP CBT のご紹介」の 3 点をお話いたします。

まず、2015年度のTEAPは年3回実施し、実施会場は11都市、会場数は20数会場でした。昨年度から受験資格を高校2年生まで引き下げました。昨年度の申込者数は3回合計1万3,126名。2014年度が約1万名でしたので、前年比30%程度増加しています。

続いて、2017年度入試TEAP活用状況についてお話しします。大学入試におけるTEAPをはじめとした外部試験の使い方は大きく4つあると考えております。その4つは「出願基準方式」「みなし満点／みなし配点方式」「加点方式」「個別試験代替方式」です。今日ご登壇いただく上智大学、立教大学、早稲田大学すべて、出願の条件として最低点を設定する「出願基準方式」が使われています。

最近多くなっているのは「みなし満点／みなし配点方式」です。例えば一般入試の外国語の試験や、センター試験のスコアに換算する方式です。換算の仕方はいろいろあり、一定のスコアを出すと満点にする場合と、80点・90点・100点といった形で換算されるものがあります。東洋大学が一般入試の方式で、TEAPを含む外部試験のスコアを一般試験の外国語に換算するのですが、特徴的なのは、外部試験が90点に換算されたとして、入試当日の外国語試験で100点を取った場合、100点を使っていくという外部試験と当日入試のどちらか良いスコアを利用することが可能な形となっています。

「加点方式」は、外部試験のスコアを一般入試やセンター試験の外国語のスコアに加点する方式です。例えば、明治大学経営学部は加点方式だけでなく、出願基準方式と加点方式をブレンドした形にしています。

「個別試験代替方式」はほとんどなく、青山学院大学の経済学部と経営学部のある方式の中で、TEAP2技能のスコアをそのまま判定に使用します、という発表がありました。そのままスコアを使えるという意味では良いと思いますが、複数の外部試験を採用される場合にはテスト間同士の換算が問題になってくるかと思しますので、採用するのはなかなか難しいかと思いますが、こういった方式もあるということでございます。

最後に、「TEAP CBT」をご紹介します。TEAP CBTは、TEAPの特徴を結集しつつ、今後グローバル社会を牽引するために英語4技能の測定が必要になってきたので開発させていただきました。ICTを活用し、大学で必要とされている必須の英語力を高めましょう、というねらいがあります。2017年度入学試験では上智大学がTEAP CBTの正式採用を決定いたしました。現在、申し込み画面の開発を進めておりますので、高校の先生方には、上智大学を受験される生徒がいましたら、お勧めいただければと思います。



(上智大学 伊呂原隆氏)

## 「2016 年度入試概況および 2017 年度に向けての展望」 上智大学 理工学部教授・学事局入学センター長伊呂原隆氏

**伊呂原氏:**今回は、前半ですでに終わった 2016 年度入試の概況をご説明させていただき、後半でこれから行う入試はどうなるのか、という流れで進めさせていただきます。

本学では一般入試で 2 つの方式を導入しています。1 つは従来からある「学科別」、それに対して 2015 年度入試から新しく始めたのが「TEAP 利用型」です。TEAP 利用型をご説明させていただきますと、他 2 科目のところでは従来はマークシート方式だったわけですが、ここに記述式を導入いたしました。文章の理解力や論理的思考力を問うことによって、総合的な学力テストを測定したということ、これも TEAP 利用型入試のポイントでございます。2015 年度は全学科 2 技能、2016 年度は 2 技能学科+4 技能学科、そして 2017 年度は理工学部も含めまして、全学科 4 技能を課そうと予定しております。2016 年度に引き続き、技能別条件はあるということでございます。さらに、TEAP CBT も導入をいたします。

2016 年度の TEAP 利用型入試では、英文学科や総合グローバル学科など 9 学科は 4 技能、それ以外の学科は Reading+Listening の 2 技能という形で実施いたしました。他 2 科目の記述式では、長い文章を読ませて、かなりの文章量で論じさせる問題を出題しています。もちろん採点は大変ですが、これによって高校の学習の変化を期待しております。

TEAP 利用型入試の出願状況につきましては、2015 年度に約 1 万名の志願者がおりました。学科別と合わせましても過去最高の志願者数で喜んでいました。しかし、ある程度予想はしていたのですが、2016 年度の志願者数はほぼ半減というように、激減いたしました。理由は「4 技能を導入したから」と、はっきりしております。2015 年度は競争倍率 10 倍を超えた学科が 10 ほどありまして、相当倍率が高かったと思いますけれども、2016 年度は志願者が減って競争倍率も下が

りました。それでも全体平均で約4倍の競走倍率は確保したというところでございます。  
これだけ見ますと、「4技能は受験者確保という点でいかなものか」と、ネガティブな意見になってしましますが、本学の意味としてさまざまな分析の結果「TEAP 利用型入試をさらに拡張しよう」という意気込みで続けていくところでございます。  
本学では、TEAP の得点はあくまでも出願基準であって、合否判定に一切利用しておりません。結果として、TEAP で高得点を取っていても不合格者はいますし、出願基準ギリギリの志願者の中に合格者がたくさんいるという結果になっております。これは本学の、TEAP 導入型入試に対する考え方で、単に英語力が高い学生を求めているわけではなく、各学科が要求している英語能力を満たす学生が欲しいというだけなので、このような結果となっております。  
2017年度の展望としては、全学科で4技能を導入いたします。それは、アウトプット型の能力を持った学生を求めることによって、発信型のグローバル人材を育てていきたいという本学の思いでございます。

(立教大学 松本茂氏)

### 「立教大学における4技能入試～導入・結果・展望～」

立教大学 経営学部教授(入試委員)・グローバル教育センター長  
松本茂氏



**松本氏:**立教大学では、4技能入試を導入するにあたって、まず導入の目的についてディスカッションをしました。導入の目的は、1つ目「グローバル人材の育成。『自ら考え、行動し、世界とともに生きる』』という、リーダーを育てていきたいということです。本学におきましては、交換留学および海外インターンシップを多くの学生に体験してもらいたいと考えております。また、専門の授

業を英語化していく。英語「で」学ぶことが大学の一つの重要な方向性であり、それを実現するために我々は 4 技能入試の導入を決めました。2 つ目「高大接続への寄与」ということです。ここにお集りの高校の先生の中には英語の授業を英語で行って、生徒主体の活動を展開されている方もたくさんいらっしゃると思います。そういう先生方をサポートしたい。現行の学習指導要領にのっとった授業をされている先生、そういう高校の生徒たちと仲良くさせていただきたい、という考えから行いました。そして一般入試において、グローバル方式を 2016 年度入試に導入することを決定しました。一般入試であり、4 技能のみであり、全学部全学科同時に、しかもテストの使い方も統一したという意味では全国初の試みでしたので、マスコミにも数多く取り上げられました。本学では全学部の入試が 1 日で行われる日があり、その日の入試においてグローバル方式を選択できるということです。

なぜ 4 技能なのかというと、先ほど挙げました「グローバル人材の育成」という観点では、大学に入ってから交換留学を目指すということでは「間に合わない」ということが、我々の問題意識としてありました。交換留学協定を結んでいたとしても、受け入れ先の大学の英語の受け入れ基準を満たしている必要があります。そのためには高校時代から 4 技能をバランスよく学習しておいていただかないと難しいということです。

「高大接続への寄与」という観点から言いますと、高校で 4 技能統合型の授業を増やしてほしいという思いがございます。なぜなら、本学では英語で行う専門の授業の数をかなり増やしており、これとの接続です。私個人としては、「大学では、英語そのものの授業がなくなる日が早く来なければいけない」と思っています。高大接続という目標を達成し、大学に入ったら英語「で」一般教育科目や専門科目を学習する、という状況を早く作りたいということです。

本学では「2019 年度までに入学定員の 50%を 4 技能入試で入学させます」と約束しています。これは受験生を増やすために行うのではなく、「日本の英語教育を皆で改善していこう」という気持ちでやっておりますので、ぜひそこをご理解いただき、ご支援いただければと思っております。



(早稲田大学 安藤文人氏)

## 「大学が考える英語 4 技能化と入試改革—早稲田大学文科構想学部・文学部の場合—」

早稲田大学 文学学術院教授

安藤文人氏

安藤氏:早稲田大学では、英語を含めて、カリキュラムは各学部独立した形で運営されています。ですから、今回の 4 技能入試を導入しますのも、全学ではなく、文化構想学部・文学部に限られています。

まだ第一文学部・第二文学部であった 2004 年度に、わたしたちは英語カリキュラムの全面的な改編を行いました。技能別科目であったものを 4 技能統合型の目的別科目にすべて変更し、また教授言語をすべて英語に切り替えました。このようにして訳読が出来ないように、訳読英語教育からの脱却を図ったわけです。

さらに、2007 年度には学部改編を行い、現在のような文化構想学部・文学部という形になりました。全面的な英語入試問題の改編も行い、指示文を含めすべて英語にし、英文による英文要約問題を導入、サンプル問題も提示しました。

今回の 4 技能入試の背景には、第一に高大接続を推し進めたいという動機があります。また、早稲田大学には、創立 150 周年となる 2032 年に外国語による授業の割合を全体の 50 パーセントまで高めるという数値目標があります。このためには、当然学生が英語による授業で単位を取得できるだけの力をつけておく必要がありますが、入試ひとつとっても、この目標に対応ができていない。「これを達成するためにはどうすれば良いのか」と悩んでおりましたら、事務方から「TEAP という英語試験がありますよ」と教えてもらいました。そういうわけで、TEAP を開発された吉田研作先生を上智大学に訪ね、レクチャーを受けた次第です。吉田先生の「TEAP は学習指

導要領に準拠したテストだから、高校の授業と TEAP のための勉強は同じ事になります」という言葉に、私たちも「そういう試験があるならば、大学合格のためには高校の勉強をしっかりとやりさえすればいい、という形ができる」と思い、TEAP 導入に動こうと考えました。簡単ではありませんでしたが、1 年くらい粘ってやっと学部内で認めてもらうことができました。

私どもの導入の狙いは、まず 4 技能にわたってバランスのとれた力を有する学生を獲得することにあります。学習指導要領に沿った高校の勉強をまずしっかりとやっている学生に入学してもらいたい。もうひとつ、私どものディプロマ・ポリシーである「多様な学問・文化・言語・価値観の交流を育み、地球全体に主体的に貢献できる人材を育成する」という目標を達成するためには、英語による発信能力はまず欠かせません。

しかし、4 技能入試によって「どんな学生が欲しいか」という点について敢えて申しますと、すでに英語の力に優れた学生、というよりは、英語が言語である以上それを「4 技能にわたって使おうとする学生」がほしい、という気持ちを強く持っています。これを“4 技能志向型学生”と私は呼んでいます。これは英語に限りません。アクティブラーニングの重要性が言われておりますが、つまり「他人と話したい、その中で自分の考えを発信していきたい」という志向性を持った学生です。そういう学生を確実に獲得していきたいというのが、4 技能入試導入の根本的なねらいだと言えます。

## パネルディスカッション「4 技能入試元年でみえた課題と今後」

モデレーター: 松平知樹(公益財団法人 日本英語検定協会)

パネリスト: 齋藤潔氏(文部科学省 国際教育課 主任学校教育官(国際教育担当))

伊呂原隆氏(上智大学 理工学部教授・学事局入学センター長)

松本茂氏(立教大学 経営学部教授／入試委員・グローバル教育センター長)

安藤文人氏(早稲田大学 文学学術院教授)



### 大学入学希望者学力評価テストの展望と

### TEAP など外部試験の関連性について

松平: 2020 年から実施される「大学入学希望者学力評価テスト」の展望と、TEAP をはじめとする外部試験の関連性についてご意見をお聞かせください。

齋藤: 今年の 3 月 31 日付けでシステム改革会議の最終報告が出ておまして、この中で「評価テスト」のアウトラインが示されています。この中で、大学英語の入試に関しては基本的に 4 技能を評価する、ということが明示されています。

実施可能性につきまして、問題となっているスピーキングに関しては、手間とコストがかかりますので、共通テストとしての実施がどれくらいできるか、ということを検証することになっています。しかし、その上で、原則的には 4 技能を導入する方向になっています。

民間の資格検定試験との連携については、具体的な中身がまだ決まっておりません。大学入試センターの下で民間の検定試験のノウハウを活用する方法から、完全に民間の検定試験を大学入試センター試験の代わりに活用するという方法まで、様々な可能性があります。共通テストの

下で、どのあたりに線を引くのかという点につきまして、検討をすべきという状況になっています。

**伊呂原:**上智大学では、2020年度から導入されるであろう評価テストを先取りする形で、TEAPという4技能を使った外部試験を導入している、と思っています。4技能導入の方向性はもちろん賛成ですし、そういう方向に本学も向かって動いています。ただ、現状のセンター試験には本学は参加しておりませんので、今後、評価テストの形がはっきりした段階で考えていきたいと思っています。

外部試験を取り入れただけですべて解決するのは、私は難しいと思っています。それはあくまでも導入で、松本先生がおっしゃるように、入学後の学生に「大学側が何を用意できるのか」ということです。こちらも必死になって、4技能が優れた学生のためのカリキュラムやプログラムを用意し、グローバルな教育体系を考えていかなければダメだろうと思います。

**松本:**私は「大学入学希望者学力評価テスト」で4技能テストが導入されることを期待しています。導入延期にならないように、文部科学省に頑張ってくださいと思っていますところでは。

大学の使命としては、「4技能入試をなぜ導入するのか」というビジョンをはっきりさせることだと思います。大学入学後、4技能入試で入学した学生をどうプログラムで教育するのかを、もっと皆さんにお知らせしなければならないと思っています。ここにおられる皆さんが卒業された頃の大学の授業をイメージされていると、今はすごく変わってきています。

**安藤:**評価テストへの4技能試験導入はぜひとも進めていただきたいですね。大学入試を変えることによってはじめて高校の授業が4技能に変わっていくのだと思います。文部科学省の皆様にはぜひとも頑張ってください。

しかし、せっかく高校の4技能型授業で磨かれた力が大学の英語教育につながらないというのでは何にもなりません。大学側は4技能を前提とした英語による一般・専門科目を増やしていかなければなりません。そのなかで、英語でしかコミュニケーションがとれないような留学生が当然のように授業にいる、そういう状況が用意されなければいけないと考えています。いずれ学生のほうも、英語による科目だから構えたり、敬遠したりすることもなくなり、「私は内容で科目を選びます。英語とか日本語とか、別にどちらでも構いません」というようになるまで持っていきたい。理想ですが、そういう形につながるものとして4技能による学習を位置付けたいですね。

#### 4 技能を教育することの意義と必要性

##### さらに今後の大学教育の方向について

**松平:**4技能を教育する意義と、今後の大学の方向性についてお話しください。

**齋藤:**英語の能力というのは「英語を使って何ができるか」、そのコミュニケーション能力だと感じますが、その部分が求められているのかなと思います。

**伊呂原:**私は理工学部の所属ですが、理工のように数式をいじったり、実験をやっているところでも、国際会議で発表したり、論文を書いたりする時は英語です。また、私の研究室にも日本語ができない外国人研究生がいます。そうすると、国内にいても英語が必要です。

本学では、英語で国際関係やビジネスを学ぶ、ということを行っています。つまり、4 技能入試で入学してもらわないと、大学で英語自体の教育をやっている間に卒業を迎えてしまうのです。入学後にすぐ実質的な教育に入るためには、高校の段階から 4 技能を身につけてもらい、大学で真の実力をつけて社会に出てほしいのです。そう考えると 4 技能は必須だと考えております。

**松本:** はい、大学らしい教育をするためには、4 技能ができなければならない、ということですね。4 技能にするということは、読解力を軽視しているわけではなく、読解力はものすごく重要です。私どもの国際経営学科では、2 年次の全員が約 500 ページもの英語テキストを読み、英語で授業ノートをとります。その後、英語でディスカッション、リサーチ、質疑応答があり、最後に英語の筆記試験にトライします。ですから、読解力は重要ですが、日本語に訳して読むのではなく、英文を読んで、英語でサマリーを書いて、その内容について質問できる、というくらいの読解力がある、ということですね。

そういった英語力が、アカデミックな分野では必要だと考えると、やはり 4 技能にしていくことが絶対重要です。文部科学省もいろいろな施策を提案し、実行されていて、「近いうちに大きく変わる」と期待しております。高校の先生方が大変お忙しい中で、「今さら急にそんなことを言われても…」と思う気持ちはわかるのですが、ここで我々大学教員が高校の先生方と力を合わせて、このチャンスを活かさないと、日本の英語教育に改善の余地はなくなってしまうと思います。「この好機を逃さないように、力を合わせて頑張りましょう！」というのが、私からのお願いです。

**安藤:** これから私たちが目指さなければならないのは、最終的には学生が英語でアウトプットすることを当然と考える、そういう教育です。翻訳をおこなわないで英語を理解し、英語で思考を組立て、英語でアウトプットするならば、その成果を世界の人間と共有できます。それを最終目標とするならば、4技能というのは必然的な流れではないかと考えています。



## 大学が求める学生、優秀な学生とは

**松平:** 大学が求める学生とは、優秀な学生とは、どのような学生でしょうか。お考えをお話してください。

**齋藤:** 私の個人的な意見なのですが、限られた時間の中で受験英語を学んで、ある程度の得点を取る学生が“優秀な学生”と、思っている方がまだ多いのかなと。そういう受験勉強で良い点を取れる学生を“優秀”というのか、それとも 4 技能を使ってコミュニケーションやアウトプットをするポテンシャルのある学生を“優秀”と捉えるのか、そこは捉え方の違いだと思っています。

それは大学関係者も、実際の受験生や保護者の方々もそうです。その考え方をどのように変えていけるのか、というところにかかってくるので、国際共通語である英語で発信していくポテンシャルの重要性を高めていくということでもあるのかなと考えています。

**安藤:** これは全く個人的な意見ですが、私は明日からでもすべての学生を 4 技能試験でとりたいと思っています。それができない事情は現実としてありますが、高校が 4 技能で英語教育を行っているのであれば、大学入試も 4 技能にしなければなりません。

私は、なにより高校の授業をきちんと、熱心に受けた生徒を学生として迎え入れたいと思っています。「早稲田大学に入るにはどんな勉強をすれば良いのですか」と聞かれたら、「特別なことは必要ありません、高校の授業をしっかりと受けてください」と言えるようになりたいと思います。そのためには、高校における 4 技能型の英語授業と 4 技能大学入試が必須です。理想論かもしれませんが、そういう将来を見据えながら、4 技能入試のことを考えています。

**松本:** 私は、海外インターンシップや国際ボランティアの希望者に対して面接をする仕事をしておりませんが、中には「こんなに素晴らしい学生がいるんだ！」と驚くことがあります。それはどういう学生かという、大学に入る前までにいろいろなことに興味関心を持ち、自ら課題を見つけて調べ、学習するという体験をしています。かつ、小さい時から英語を習っている学生です。こういう学生は、インターンシップやボランティアの中身に興味を持つことができます。そうでない学生は、インターンシップの志望理由の一番目の理由として「英語力を伸ばしたい」ということを挙げます。インターンシップの目的は英語力を上げることはありません。インターンシップやボランティアを通して「どんな体験や貢献がしたいのか」を聞いた時に、きちんと答えられるかどうか大きな差だと感じています。

ですから高校では、生徒たちが自ら課題を見つけてグループ学習で学び、最終的には英語でプレゼンテーションをする、論文を書く、というような、スーパーグローバルスクールで展開しているような授業をしていただけると良いと思います。私たちは、そういう学生を求めています。

**伊呂原:** 一言で結論から言いますと、「問題発見できる学生」が求める学生像です。

大学に入学して様々な学部学科でいろいろな勉強をすると、問題解決能力は上がってきます。しかし、「一体何に取り組むべきなのか」「一体何が真の問題なのか」これらが真の問題ですね。その真の問題を発見して、解決していく力のある学生を育成しようと思ったならば、やはり“発信型グローバル人材の育成”となるでしょう。

本学では、「真の問題を発見し、それをきちんと解決し、世界を変えていく」、そういう人材育成をやっていきたくて考えておりますので、そういうポテンシャルを持った学生を求めたいと思っています。

#### 最後に、4 技能入試の未来と 大学の英語教育の展望について

**松平:**最後に 4 技能入試の未来、そして大学での英語教育の展望を皆様にお聞きし、会を閉めさせていただきます。

**齋藤:**必ずしも文部科学省全ての声を代弁しているわけではありませんが、英語教育に関しまして、4 技能を導入していくことが“正しい英語教育”と言いますか、英語習得の筋道として正しい方向に導いている、というシグナルになるのではないかと考えています。

大学関係者にも 4 技能のさらなる能力開発に取り組んでいただき、文部科学省としても、皆さんの活動を後押しできるように力を尽くしていきたいと考えております。

**伊呂原:**本学では、4 技能を導入した学科の志願者が減り、今後さらにどうなるのか…という感じですが、「それでも 4 技能入試をやる！」というのが我々の考えているところです。つまり、本当に能力の高い学生を入学させ、良い学生を本学から輩出していくんだと、そういう思いです。それによって、「日本の中等教育や英語教育全体を変えていくんだ」という強い意気込みでやっていきたいと思っています。今後とも、どうぞ応援をよろしくお願いいたします。

**松本:**4 技能入試を大学のより多くの学部で導入するためには、強いリーダーシップを持った人が必要です。そして、志の高いメンバー、実働部隊も必要です。しかし、どの大学の場合でも、強いリーダーシップを持った人や志の高い実働部隊は、まだ残念ながら少数だと思います。

今日、ここにおられる方々は、同じ志を持っていらっしゃると思います。「日本の英語教育を良くするんだ、そのためには大学も貢献すべきである。できることをやろう」という志を持って、強い気持ちで進んでほしいと思います。

**安藤:**中学校、高校の先生方のご努力のおかげで、今、入ってくる学生の英語力は年々目に見えて上がっています。学生は本当に4技能を使いたがっています。4技能を使おうとしている学生を止めるような教育であってはならないのではないかと考えています。

言語教育である以上、4技能にわたって英語を教えるのは、本道、当たり前じゃないですか。当たりのことが今までできていなかったわけです。やっと本道に戻り、本来の英語教育ができる、その時が目前に来ているのではないかと思います。皆さん、ともに頑張りましょう。